

# 『浄土真宗聖典全書』第六卷 「補遺篇」の刊行にあたって

浄土真宗本願寺派総合研究所  
教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉

## I はじめに

浄土真宗本願寺派総合研究所〈聖典編纂担当〉では、親鸞聖人七百五十回大遠忌を機縁として、『浄土真宗聖典全書』（以下『聖典全書』と略称）の編纂を推進してきました。

『聖典全書』は「浄土真宗のすべての聖教を収め、高い史料性を保持しつつ、領解・伝道に活用できる聖典」を基本理念として編纂されています。これ

までに、浄土三部経とその異訳經典、および七高僧の論釈を収録した「三経七祖篇」、宗祖親鸞聖人の真筆を全て網羅した「宗祖篇 上」「宗祖篇 下」、親鸞聖人より後の門弟や本願寺第三代宗主覚如上人や存覚上人、第八代宗主蓮如上人の撰述や伝記、言行録などを収録した「相伝篇 上」「相伝篇 下」の計五巻が刊行され、関係学校をはじめとして宗門内外を問わず、学術的に高い評価を得て、多くの場所でご利用いただいています。

今回は、本年三月に刊行されました『聖典全書』の最終巻である、第六巻「補遺篇」の内容をご紹介しますと思います。

## II 「補遺篇」の内容

Iで紹介した既刊の『聖典全書』に対し、「補遺篇」は、それぞれの巻に収録された聖教・史資料の内容を補完することを目的とし、源空（法然）聖人の法語や伝記をはじめ、親鸞聖人のみ教えを継承された門弟等に関連する聖教・史資料などを四十三点収録いたしました。「補遺篇」収録の聖教・史資料は次の通りです。

・源空聖人の法語・伝記等及び関連史資料（「三経七祖篇」関連）

一枚起請文、二枚起請文、法然聖人御消息、七箇条制誡、黒谷上人語灯録、法然上人伝記（醍醐本）、法然上人伝法絵、興福寺奏状、一向専修

停止事（停止一向専修記）

・大谷廟堂の創立や、親鸞聖人の門弟に関する記録等（「宗祖篇」関連）

大谷廟堂創立時代文書、親鸞聖人門侶交名牒、三河念仏相承日記、制禁

（善田十七箇条、浄興寺二十一箇条、了智六箇条）

・本願寺教団の動向や葬送・中陰に関する記録（「相伝篇」関連）

本福寺史料集成（本福寺由来記、本福寺明宗跡書、本福寺跡書、本福寺門徒記、教訓并俗姓、本福寺由来、本福寺次第草案、金森日記抜）

葬送中陰記（蓮能葬記、蓮芸葬中陰記、実賢葬中陰之記、実如上人闍維中陰録、蓮淳葬送中陰記、本善寺殿実孝

御往生之記、信受院殿記（証如上人記）、順興寺実従葬礼）

・他派の教団に関する聖教・史資料（「相伝篇」関連）

専修寺史料（顕正流義鈔、十六問答記、代々上人問書・高田上人代々問書）

佛光寺史料（算頭録、一流相承系図（絵系図））

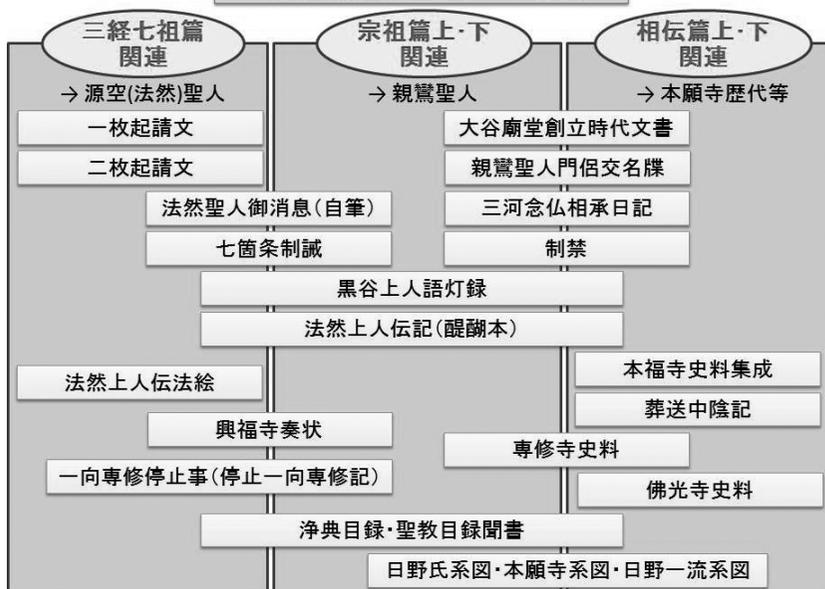
浄土真宗の聖教目録や、本願寺・日野家に関する系図（全巻）

浄典目録、聖教目録聞書系図（日野氏系図、本願寺系図、日野一流系図）

以上のように、「補遺篇」は『聖典全書』の各巻にまたがる内容となっており、例えば次のような関連があります（併せて下図「補遺篇」と他巻との関係）もご参照ください。

源空聖人の法語や伝記については、「宗祖篇下」には親鸞聖人真筆・真仏上人書写の『法然聖人御消息』を収録していますが、「補遺篇」では源空聖人自筆の『法然聖人御消息』を収録しています。また、「宗祖篇下」の『西方指南抄』や「相伝篇上」

「補遺篇」と他巻との関係



の『拾遺古徳伝絵詞』は、「補遺篇」の『黒谷上人語灯録』や『法然上人伝記』（醍醐本）などに共通する記事が見られます。

親鸞聖人の門弟については、「宗祖篇

上」では「親鸞聖人御消息集成」によって親鸞聖人と東国門弟とのやりとりが知られますが、その門弟については、「補遺篇」の『親鸞聖人門侶交名牒』などに詳しく記録されています。

また、蓮如上人の言行については、「相伝篇 下」に「蓮如上人言行録集成」としてまとめられています。「補遺篇」の『本福寺史料集成』には蓮如上人や当時の本願寺教団の具体的な動向が記されています。殊に、蓮如上人の葬送について、「相伝篇 下」の『空善聞書』や『蓮如上人御一期記』などに記録されていますが、「補遺篇」所収の『金森日記抜』にはより詳細な動行の様子が記録され、さらに「葬送中陰記」によって蓮如上人以後の葬送の様子を窺うことができま

す。このように、「補遺篇」と各巻の間で内容が関連するものを比較・対照することで、源空聖人や親鸞聖人、蓮如上人のみ教えや生涯などをより深く学ぶことが可能となります。

### Ⅲ 「補遺篇」の特色

それでは、「補遺篇」の内容を具体的に見ていきましょう。

#### 1 源空聖人の法語

源空聖人のみ教えが記された法語や御消息は、「宗祖篇 下」の親鸞聖人真筆『西方指南抄』や『法然聖人御消息』にも収録されていますが、ほかにも多種多様なものが伝えられています。

『二枚起請文』は源空聖人最晩年に示されたもので、「たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申て、疑なく往生するぞ」と思とりて申外には別のさい候はず」(『聖典全書』六・五頁)などと、源空聖人の念仏領解が簡潔にまとめられたものです。多くの書写本のほか、貞治四(一三六五)年に刊行されるなど、幅広く受容されています。そのような中で、蓮如上人はこの『一枚起請文』と伝源空聖人作の『二枚起請文』を一具のものとし

て書写されており、浄土真宗においても重宝とされていたことが知られます。

『法然聖人御消息』(京都府清涼寺蔵)は、源空聖人の筆跡を伝える数少ない貴重な史料とされています。また、『七箇条制誠』(京都府二尊院蔵)には、源空聖人自署の花押かおうに続いて、百九十名もの門弟の署名が記されていますが、その中に、若き日の親鸞聖人の筆跡が伝えられています。

これらは、書写本として単体で伝来するとともに、まとめて収録された集成本としても伝えられました。「補遺篇」所収の『黒谷上人語灯録』は、源空聖人の法語を集めた典籍として文永十一(一二七四)年頃に浄土宗の了恵りょうえ(一二四三〜一三三〇)によって編纂されたものであり、親鸞聖人真筆の『西方指南抄』と並んで、源空聖人のみ教えを学ぶための重要な典籍と位置づけられています。その内容は多岐に亘り、源空聖人が「浄土三部経」を講義した内容とされる三部経きょうしやく、各種消息、源空聖人自らが人々

の疑問に答えた問答形式の法語などがあ  
ります。それらには、口語体に近い文体  
のものも多く含まれており、源空聖人の  
言葉がそのまま感じられるような内容も  
含まれています。

『黒谷上人語灯録』は、漢文で書かれ  
た「漢語灯録」と和文で書かれた「和語  
灯録」に大別され、それぞれ「拾遺漢語  
灯録」「拾遺和語灯録」が追加されて成  
立しましたが、それぞれ伝来が異なりま  
す。「補遺篇」では、「漢語灯録」「拾遺  
漢語灯録」は中世にさかのぼれる内容を  
持つ最も古い書写本（恵空本・転写本・大  
徳寺本、いずれも江戸時代）を、「和語灯  
録」「拾遺和語灯録」は編者である了恵  
自身が手がけた元亨元（二二二）年刊  
本（龍谷大学蔵）を底本（活字化するため  
の元になる本）として選定して翻刻しま  
した。さらに、「漢語灯録」では、第一  
巻・第二巻でそれぞれ本文が省略されて  
いる「無量寿経・釈」「観無量寿経  
・釈」について、巻尾にその本文を伝え  
ている『三部経私記』を付して翻刻しま

した。また、「和語灯録」では、元亨元  
年刊本の湮滅箇所（虫損などにより文字  
の判読が難しいところ）を、元亨元年刊  
本の文言を書き写した転写本によって適  
宜補うことで、本文の読解ができるよう  
にしました。

## 2 源空聖人の伝記等

「補遺篇」では、源空聖人の法語・御  
消息等に加え、『法然上人伝記』（醍醐  
本）などの伝記類や、『興福寺奏状』な  
どの記録類も収録しています。

源空聖人の伝記の中で成立が最も古い  
もののひとつとされているのが京都府醍  
醐寺蔵『法然上人伝記』（醍醐本）です。  
また、宗祖の直弟の一人であり高田派専  
修寺第三世顕智上人書写の『法然上人伝  
法絵』は、源空聖人の伝記の中で書写年  
時が最も古い書写本として知られていま  
す。源空聖人の伝記としては、「相伝篇  
上」に覚如上人撰述の『拾遺古徳伝絵  
詞』を翻刻していますが、これらを併せ  
読むことで、源空聖人のご生涯をより深

く知ることができます。「補遺篇」では、  
巻末の付録として『黒谷上人語灯録』  
等諸本対照表」を収録することで、『黒  
谷上人語灯録』と、『西方指南抄』や  
『法然上人伝記』（醍醐本）、『拾遺古徳伝  
絵詞』、『法然上人行状絵図』（四十八巻  
伝）などとの間で、本文が一致するもの  
や内容に関連があるものが容易にわかる  
よう工夫しました。

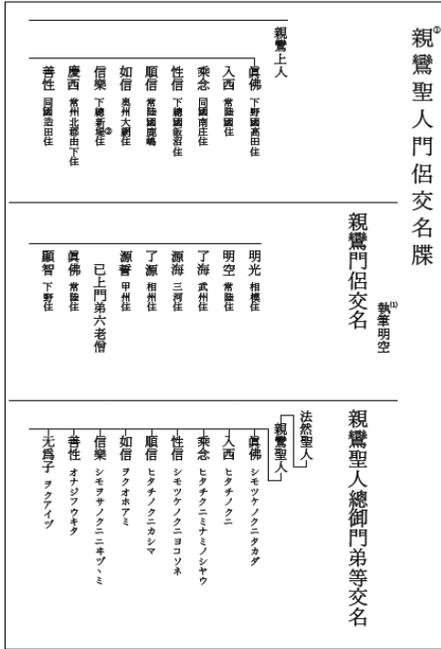
また、源空聖人や親鸞聖人が配流にあ  
った、いわゆる承元の法難に関する資  
料として知られ、解脱房貞慶起草によ  
って専修念仏停止を訴えた『興福寺奏  
状』や、延暦寺の衆徒が専修念仏に対  
して弾圧をはかった嘉祿の法難に関する  
史資料として知られる『一向専修停止  
事』（停止一向専修記）は、これまでの刊  
行物には翻刻されていない書写本が多く  
伝えられています。そこで「補遺篇」で  
は、全国各地から史資料を収集し、善本  
（内容や形式などがすぐれた本）を選定し  
た上で、源空聖人や宗祖の生涯を知るた  
めの重要な史資料のひとつとして収録し

ました。

### 3 親鸞聖人の門弟や初期教団に関する資料

親鸞聖人に関する史資料として、「補遺篇」では、親鸞聖人を中心とする系譜を明らかにした「系図」や、親鸞聖人の門弟の名を記した『親鸞聖人門侶交名牒』などを翻刻しています。

『親鸞聖人門侶交名牒』は、親鸞聖人に連なる門弟を、地域や集団ごとに列挙したもので、親鸞聖人の門弟の広がりを知る上で貴重な資料です。原題は「親鸞上人門弟等交名」と想定されており、鎌



『親鸞聖人門侶交名牒』翻刻イメージ  
 ※上段から、愛知県妙源寺蔵本、茨城県光明寺蔵本、京都府光園院蔵本

倉幕府などに提出するために制作された

系統（愛知県妙源寺蔵本や茨城県光明寺蔵本）や、それと共通した部分を伝えながら特定の門徒集団の名を多く記した系統（京都府光園院蔵本など）の書写本が伝えられています。元々は、親鸞聖人の

門弟の実態を内外に示すために制作されたものですが、書写本ごとに独自の情報が付加されており、大変興味深い資料です。「補遺篇」では、収録した三本の異同が一目でわかるよう、上段に妙源寺蔵本、中段に光明寺蔵本、下段に光園院蔵本を配置し、三本を対照する形式で翻刻

### 4 本願寺などの教団に関する資料

「補遺篇」では、宗祖以降の本願寺や専修寺・佛光寺の他派教団に関する史料も充実しています。「大谷廟堂創立時代文書」は、宗祖の墓所である大谷廟堂の成り立ちや、その寺院化、廟堂留守職の継承などについて記された文書をまとめたものです。覚如上人の『親鸞聖人伝絵』（御伝鈔）巻下・第七段には、文永

九（一二七二）年に大谷（鳥辺野の北）にあった親鸞聖人の墓所が吉水の北の地に移転された時のこととして、「仏閣をたて、影像を安ず」（『聖典全書』四・一〇四頁）とあります。『大谷廟堂創立時代文書』からは、その土地の移譲や、廟堂・敷地の管理に関する事項を窺うことができます。また、廟堂留守職に就任することになる覚信尼公・覚恵上人・覚如上人と、東国の有力門弟等との間で頻繁にやりとりが行われていたこと、その文書が各所で大切に保管されてきたことなどを、本文やその他の書き入れなどによって学ぶことができます。

次に、蓮如上人やその後の時代に関する史資料として、「本福寺史料集成」や「葬送中陰記」があります。「本福寺史料集成」は、滋賀県堅田本福寺の歴代住職が記録してきた史料群であり、蓮如上人や、本願寺教団の動向などについて知ることができません。また、「葬送中陰記」は、本願寺第九代宗主実如上人・第十代宗主証如上人といった本願寺宗主や、蓮如上人の室である蓮能尼、また蓮如上人の子息等の、葬送や中陰の次第などが記録されたものです。蓮如上人がご自身の葬儀の次第等についてご遺言を残されていたことは、「本福寺史料集成」の『金森日記抜』や、「相伝篇 下」所収の『蓮如上人遺徳記』などに詳しく示されていますが、「補遺篇」所収の「葬送中陰記」からは、上人のご遺言をもとに浄土真宗の葬送儀礼が定型化していく様子が窺え、現在の葬儀や法要などで勤められる次第（正信念仏偈・念仏・和讃）が形成されていった過程を具体的に知ることがができます。

## 5 解説・付録等の充実

「補遺篇」では、各聖教・史資料の冒頭に解説を設け、最新の研究成果に基づいてそれぞれの内容や成立、原本の書誌的な情報等を紹介しています。また、巻末には次のような付録を掲載しています。

- ・ 底本・対校本一覧
- ・ 収録聖教書誌一覧
- ・ 『黒谷上人語灯録』等諸本対照表
- ・ 『大谷廟堂創立時代文書』一覧
- ・ 『親鸞聖人門侶交名牒』三本対照索引
- ・ 『本福寺由来記』・『本福寺跡書』対照表
- ・ 系図主要人物一覧
- ・ 『浄土真宗聖典全書』全目次・諸翻刻一覧
- ・ 年表

先に紹介した『黒谷上人語灯録』等諸本対照表、「親鸞聖人門侶交名牒」等三本対照索引」以外にも、関連する他の

聖教・史資料や既翻刻資料などを一目で対照・検索できるよう工夫したものを多く揃えました。また、巻末には聖典を拝読する上で、とくに留意すべき重要な語句を解説した「補註（要語解説）」を掲載しています。

「補遺篇」や既刊の『聖典全書』を字ばれる際には、ぜひこれらをご活用いただければと思います。

## IV 史料並びに校異の充実

Ⅱで述べましたように、「補遺篇」には四十三もの聖教・史資料が収録されています。そのいずれにおいても、学界等で高い資料的評価をうけている善本を底本や対校本（底本と比較対照する本）として採用し、中には『聖典全書』で初めて翻刻する史資料も含まれています。底本だけではなく、対校本においても善本を用いており、充実した校異（底本と対校本との相異を示したもの）が可能となりました。わたしたち聖典編纂担当にお



きましては、全国各地の寺院や関係学校などに所蔵されている貴重な聖教・史資料の原本を調査させていただいてきました。それは本願寺派の寺院だけではなく、真宗諸派や浄土宗、天台宗など諸宗の寺院、各地の関係学校や公立・私立の図書館などにもご協力いただきました。そのような調査の結果として、底本・対校本に多くの原本を用いられることを嬉しく思いますとともに、ご協力くださった寺院や関係各所のみな

さまに、あらためて感謝申し上げます。

## V おわりに

以上見てきましたように、「補遺篇」は、これまでの『聖典全書』を補完する内容であること、また読解のためにさまざまな工夫が盛り込まれた親しみやすい聖典であることがおわかりいただけたかと思います。「補遺篇」は、「最高峰の聖典」といわれる『聖典全書』の最終巻であり、本巻が刊行されたことにより、浄土真宗のみ教えを学ぶための聖教・史資料が出揃いました。一人でも多くの方々が、『聖典全書』を座右において聖教を拝読され、親鸞聖人のみ教えが時代や地域を越えて広まっていくことを願います。

次回は、『聖典全書』全六巻についてのご紹介をいたします。

問い合わせは総合研究所（075-371-9244）まで。